

## 大学生の英文法力 — CELT の結果から —

広島大学 三 浦 省 五

### 1. はじめに

最近、大学生の英語学力の低下が嘆かれるようになった。中学校における英語の授業の週3時間制や、国公立大学入学のための共通第1次学力試験にその原因があると言われている。その原因は何であれ、大学の一般教育の中で、英語の学力を構成する中心的要因である文法力および語彙力が極めて低いクラスがあることは事実であり、将来は、英語学力の診断を実施し、それに基づいた効果的な授業の展開が一層必要となるであろう。

本稿では、大学生の英文法に関する学力について、毎年、担当クラスに対して行なっているテストの結果を考察してみることを目的とし、特に、いかなるテスト項目(文型・文法事項)に対して、学生はどのような反応を示しているかについて言及してみたい。

### 2. 調査の方法

#### 1) 調査の対象

昭和52年度から59年度まで、広島大学総合科学部で、一般教育の英語を受講した1年次および2年次の学生、合計41クラス、1,932名が対象となっている。被験者の専攻分野(学部)は、生物生産、学校教育、文学、教育、工学、理学、歯学、医学、総合科学、経済、法学・経済Ⅱ部の学部に分かれている。次に示す調査結果一覧では、クラス別(学部別)に英文法力の比較を行うことが目的ではないので、学部名をさけ、クラス番号を示した。

#### 2) 調査実施年月日

調査は原則として毎年前期、語彙テスト、聴解力テストとともに実施され、その調査年月日も便宜上、次の調査結果一覧表に付記した。

#### 3) 使用テスト

David P. Harris and Leslie A. Palmer, *CELT (Comprehensive English Language Test for Speakers of English as a Second Language), Structure Form S-A*, McGraw-Hill, Inc., 1970 を使用した。*CELT* の *Form S-A* は75のテスト項目。テスト所要時間は45分であり、テストの内容は、①名詞、代名詞、形容詞、副詞の形態と選択(27%)、②前置詞の選択(9%)、③動詞、助動詞に関するもの(44%)、④語順に関するもの(11%)、⑤付加疑問と省略による返答(9%)となっている。テスト形式は、A~D 4肢選択の空所補充で、問題文は、短い対話で構成されている。

“Have you finished the report for Mr. Jones?”

“Yes, I \_\_\_\_\_ this morning.”

- (A) it to him gave
- (B) gave it to him
- (C) to him gave it
- (D) gave to him it

は、CEL T Form S-A に例として示されているものである。

### 3. 調査結果(得点)と考察

調査を行なった41クラスのクラス別成績と、合計1,932名の成績の平均は表1に示した通りである。成績は100点満点に換算したものであるが、クラス平均点80.28から49.51までの開きがあり、また、個人成績を見ると、最高95点、最低21点となっている。1,932名の平均は64.89点であった。

クラスにより成績が大きく異なるのは、英語を重要視する学部や入学競争率の高い学部とそうでない学部があるからであり、そのために、2年次生の英文法の成績が、1年次生の成績より低いことも十分起り得ることである。

表1 英文法力調査年月日と調査結果一覧表(100点満点)

クラス番号	学年	調査実施年月日	人数	最高点	最低点	最頻値	平均	標準偏差
1	1	52. 9. 6	45	81	39	57	58.49	9.84
2	1	9. 7	56	92	37	64	63.17	9.67
3	2	6.18	25	93	59	76	75.84	9.29
4	2	9.17	47	85	43	65	66.04	9.29
5	1	10.27	46	80	39	61	60.87	8.97
6	2	53. 4.24	34	87	47	69	66.59	10.43
7	1	6.15	50	84	49	72	68.43	8.21
8	1	4.20	45	75	47	67	63.19	6.41
9	2	6.24	40	80	23	63	62.11	11.28
10	1	54. 2.17	37	80	57	67	69.12	6.05
11	2	4.23	38	83	40	57	61.23	8.56
12	1	4.23	40	84	47	69	69.20	8.35
13	2	4.23	58	85	21	64	64.32	10.85
14	1	4.24	57	93	57	81	80.28	6.55
15	2	4.24	56	95	56	73	76.07	8.13
16	2	55. 4.21	40	91	52	72	68.67	8.19
17	1	4.21	62	85	47	75	68.67	8.99
18	1	4.21	65	80	33	61	61.91	8.97
19	1	4.22	58	83	40	53	61.37	9.75
20	1	6.11	38	80	40	56	60.45	8.60
21	1	56. 6.22	40	88	47	63	65.47	8.52
22	2	7. 6	42	81	48	67	63.93	8.77
23	1	6.23	52	79	33	51	57.69	10.57
24	1	6.23	63	88	59	73	75.03	6.28
25	2	7. 9	41	87	47	61	68.09	9.48
26	2	57. 7. 5	41	84	40	65	66.28	8.69
27	1	4.21	48	88	49	67	72.17	8.47
28	1	4.21	47	76	25	64	60.37	10.44
29	2	4.22	44	83	43	65	60.55	9.35
30	2	4.22	46	83	40	63	62.64	9.23
31	1	4.26	49	81	28	49	51.73	12.39
32	2	4.26	39	76	24	61	51.89	10.68
33	1	58. 7. 4	39	81	47	67	65.20	8.52
34	1	7.28	44	83	32	64	65.81	9.95
35	1	4.19	57	85	39	65	64.33	9.71
36	2	4.20	52	92	56	73	74.69	7.01
37	1	59. 4.23	44	81	48	69	65.40	7.95
38	1	6.25	62	93	44	71	67.85	9.97
39	2	6.18	39	84	48	64	65.85	10.09
40	2	6.27	48	73	28	47	49.51	9.95
41	1	6.13	58	75	35	63	57.24	8.52
調査人数合計		1,932名		95	21	64	64.89	11.16

次に、大学生の平均点 64.89 点を他の英語学習集団と比較してみる。<sup>1)</sup> CELT (Form S-A) がアメリカの高校生70名に対してテストされた結果は、96～100 点をとった者62名 ( 89.0% ), 91～95 点は 8 名 ( 11.0% ) で平均 97.62 点であった。被験者は母国語話者で、70名のうち75%の学生の英語 ( 母国語 ) 学力は彼らの教師からは C と判定されていた。

また、CELT (Form S-A) が次の A～E までの集団に対してテストされたという報告もある。それぞれの集団の平均得点と標準偏差 ( カッコ内 ) は、A は 76.74 点 ( 16.03 ), B は 54.91 点 ( 15.40 ), C は 52.96 点 ( 13.16 ), D は 64.25 点 ( 21.00 ), E は 79.29 点 ( 19.11 ) となっている。A は、アメリカの大学に入学を許可された 155 名の外国人集団、B はアメリカ西部のある大学附属の集中言語訓練コースの外国人在籍者60名の集団、C は、65名の外国人留学生で、アメリカ中西部の community college で advanced-level ESL program 受講生、D は、大学 1 年生の French-speaking Canadians 122 名、平均年齢 18 才。中等教育において 5～7 年の英語学習経験を持つ集団。E は、アメリカ東部のある高校に留学し、10～12 学年で勉強している 10 代の外国人留学生 75 名で、担当の教師によると、教室においては、言語に関連した何らかの問題を持っていると言われている。D を除いてすべての集団は、ヨーロッパ、中東、極東、ラテンアメリカなど世界のさまざまな国の出身者からなり、英語学習歴もさまざまで、標準偏差値も広島大学の場合より高くなっている。広島大学の平均点 64.89 点を以上の集団と比較してみると、英語母国語話者の得点 ( 97.62 ) には及ばないとしても、D の得点 ( 64.25 ) と類似している。E ( 79.29 ) に匹敵するのは、クラス番号 14 の英語成績上位クラスであった。実際の授業において、クラス番号 14 のような成績 ( 80.28 ) であれば、読解・作文においてもあまり苦勞をしていないようであるが、クラス番号 31, 32, 40 の得点 ( それぞれ 51.73 ; 51.89 ; 49.51 ) では、聞き・話すことはもとより、読解、作文にかなりの支障をきたしている。

#### 4. 項目分析の結果と考察

テスト項目の分析を行ってみた。その結果、50% 以下の正答率しかなかった項目は、正答率の低い順に次の通りである。( ( ) 内の数字は正答率% )

まず難問上位 10 問は、

1. Item 60 It was on (page two) of tonight's paper. (14.8)
2. Item 74 ... but it was (much too) long ... (15.8)
3. Item 66 ... I wish you'd consider (going) with us. (16.1)
4. Item 75 ... I thought he (wasn't going) until next week. (27.1)
5. Item 24 ... we'd better quit (talking) and get back to work. (29.6)
6. Item 65 ... she said (she'd rather not) lend it ... (30.3)
7. Item 57 I see (the street light) is on already. (33.2)
8. Item 38 ... (he hardly ever leaves his house now). (33.4)
9. Item 68 ... they finally decided (not to). (34.0)
10. Item 49 I wish (he'd) see a doctor. (35.6)

最も難問で discrimination index ( 以下 DI <sup>2)</sup> ) が、0.124 は、「2 ページにあった」という表現で、ほとんどの人が、「the page second」か「the page two」を選んでおり、「lesson two」という表現はほとんど皆知っているが、それが page two に轉移しない事を表わしている。2 の Item 74 は、「long」の前にくるものとして、約 73% の学生が「too much」と「so much」の語順を選択している。( DI = 0.60 ) 3 の Item 66 は DI = 0.100 で成績上位の学生は、that you'll go か to go を、下位の学生

は'to going'を選択している。4のItem 75は、DI=0.219で約50%の学生はwon't goを、5のItem 24は、DI=0.118で、talk (34.3%)、from talking (18.5%)、to talk (17.5%)で'quit'に接した経験は少いようである。6のItem 65はDI=0.141で60%近くの学生は'she wouldn't rather'を撰択している。7のItem 57はDI=0.35で'the light of the street'を、8のItem 38はDIは0.195で'he hardly leaves his house ever now'を、9のItem 68はDI=0.358で、未来進行形の質問に迷わされて、not to beを40%が選んでいる。10のItem 49はDI=0.277で50%以上が'he should'を選択している。

さらに11位から18位までは、

11. Item 59 has got の表現 (37.1) (以下問題文省略)
12. Item 48 there is not any left と seem 組み合わせ (39.5)
13. Item 70 予定を示す be to ~ と時の一致の組み合わせ (43.3)
14. Item 50 継続を表わす現在完了形 (44.6)
15. Item 47 ten-dollar bill の類の表現 (45.0)
16. Item 40 find + O + C で C が hard to do (47.4)
17. Item 73 be used to + 動名詞 (47.8)
18. Item 56 I wish ... の仮定法過去 (48.3)

また反対に、正答率の高い問題は、

1. Item 3 形容詞の最上級 (the tallest building) (96.3)
2. Item 30 without + 動名詞 (94.7)
3. Item 9 付加疑問 haven't they? (94.5)
4. Item 23 be interested in + 動名詞 (94.2)
5. Item 10 stop + 動名詞 (94.0)
6. Item 33 慣用句 get rid of ... (92.6)
7. Item 1 時間を表わす前置詞 for (92.5)
8. Item 2 独立所有格 hers (91.2) となっている。

次に DI の高いもの、すなわち、成績上位群には容易で、成績下位群には困難な問題としては、

1. Item 50 現在完了形 (DI=0.516)
2. Item 61 倒置 'So had I.' (DI=0.516)
3. Item 41 倒置 'and neither will George' (DI=0.507)
4. Item 22 仮定法過去 '... I would buy it.' (DI=0.470)
5. Item 54 名詞の形容詞的用法 (dress shop / dresses shops / dresses shop / dress shops) (DI=0.462)
6. Item 67 不可算名詞の数え方で 'advice' の場合 (DI=0.455)
7. Item 55 比較級の修飾で much の用法 (DI=0.447)
8. Item 59 既出 (DI=0.445)
9. Item 64 enjoy + 動名詞 (DI=0.435)
10. Item 53 仮定法過去 'I wish ...' (DI=0.433)

などがあった。

また、DI の低い項目、すなわち、成績上位群と下位群で正答者数にあまり差の見られないものとしては、

1. Item 3 既出 (DI=0.048)
2. Item 15 「目的」を表わす場合の to- 不定詞と for + ~ing の区別 (DI=0.056)
3. Item 74 既出 (DI=0.060)
4. Item 48 既出 (DI=0.064)
5. Item 1 既出 (DI=0.075)
6. Item 6 語順 lunch room (DI=0.089)
7. Item 66 既出 (DI=0.100)
8. Item 2 既出 (DI=0.106)
9. Item 24 既出 (DI=0.118)
10. Item 9 既出 (DI=0.120)
11. Item 60 既出 (DI=0.124)
12. Item 23 既出 (DI=0.126)
13. Item 43 過去完了時制 --- (She'd left) by the time I arrived. (DI=0.133)
14. Item 10 既出 (DI=0.141)
15. Item 65 既出 (DI=0.141)
16. Item 72 I imagine (so). (DI=0.143)
17. Item 30 既出 (DI=0.178)
18. Item 18 付加疑問 ---, is there? (DI=0.193)
19. Item 37 --- had better (be) ready ... (DI=0.194)
20. Item 38 既出 (DI=0.195) となっている。

正答率が30%以下の難問や80%を越えるようなやさしい問題、DI が 0.3 以下の項目は標準テストから除かれるべきであるが、そのような視点からの検討は次稿にゆずりたい。

## 5 おわりに

本稿では、既成の標準学力テストを使用して、大学生の英文法力を見ようとしたものであるが、問題項目が75に制限されていた関係上、その目的を十分に達成したとは言えない。最近では communication の評価とか cloze test など伝達能力や総合能力を見ようとする動きがあるが、診断に基づく指導という視点からは、いわゆる discrete-point 式テストも必要であるように思われる。次回はそのようなものを作成して実施してみたい。

## 〔注〕

- 1) David P. Harris and Leslie A. Palmer, *CELT Technical Manual*, McGraw-Hill Book Co., pp. 7-10.
- 2) Discrimination Index ( 弁別指数 ) の計算法は、David P. Harris, *Testing English as a Second Language*, McGraw-Hill Book Co., 1969, pp. 105-106